

みたれてけふはものをこそおもへ
大相撲 9月場所テレビ観戦記

<1> 日馬富士優勝でよかった

横綱白鵬・稀勢の里・鶴竜の休場で始まった今場所、途中から大関高安・照ノ富士がこれに加わり、目玉のない人形のような状態の15日間になった。ただ一人の横綱日馬富士は5日目までで2勝3敗という状態で、とても優勝争いをできる内容ではなかった。

大関豪栄道は、「勝ち越してカド番を乗り切れるだろうか・」という崖っぷちからのスタート。初日の敗戦を引きずることもなく白星を並べ始めたが、相撲内容には迫力は感じられなかった。10日目あたりから鋭い出足も見せられるようになったが、突き押しで攻め込まれるとバタバタしながら叩こうとする悪いクセを度々見せて、いつ崩れるか心配な白星が続いた。

元気な若手その間を盛り上げてくれはしたが、星のつぶし合いによりどんどん脱落。気がついたら豪栄道が1敗でトップに立ち、日馬富士とは星三つの開きとなり、「もしかしたら・・・」と思ったファンもいたらしいが、やっぱり「いつもの豪栄道」が顔を出し始めて、不用意な叩きの末の敗戦の後、日馬富士に1差に迫られて千秋楽になった。

横綱と大関による千秋楽直接対決という、いかにも「らしい終わり方」に持込みはしたが・・・。

日馬富士の執念が何枚も勝る形になり、辛うじて「横綱が優勝」という体面を保つことができた。

平幕同士の同点決勝戦ならまだしも、横綱と大関が11勝4敗で優勝決定戦とは何とも情けない結末だった。

余計なことかもしれないが、私個人の印象としては「豪栄道が優勝しなくてよかった」と思っている。

もし豪栄道が優勝してしまうと、来場所に「綱とり」騒ぎが起きることになる。「カド番」と「辛うじて勝ち越し」を繰り返す大関が横綱になる力を備えているとは思えないし、仮に追い風を受けて横綱になったとしても先が見えている。それでも一部のマスコミは「優勝同点の成績なので来場所は綱とりか？」などと騒いでいる。「まじめに考えろ」と言いたい。

<2> 若手の台頭

東前頭3枚目まで躍進した阿武咲は入幕以来三場所連続して10勝5敗の好成績で敢闘賞。日馬富士・照ノ富士を破ったが豪栄道には勝てなかった。突き押し良し、はず押し良しでひたすら前に圧力をかけ続けながら二の矢三の矢を繰り出していく相撲は爽快で気持ちが良い。貴景勝もども「下がらない相撲」「叩かない相撲」は将来性を感じさせる。

西前頭5枚目の貴景勝は日馬富士・豪栄道を破って9勝6敗ながら殊勲賞に輝いたが阿武咲との受賞内容の差が理解しにくい結果となった。短軀を利した下から押し上げる鋭い突き押しと稽古で鍛えた前に落ちにくい体が功を奏した。

新入幕の朝乃山は東の幕尻、押し相撲でも四つ相撲でも取れる上に体も柔らかく将来性を感じさせる。10勝5敗で敢闘賞は上出来。来場所は真価を試される場所になるだろう。

御嶽海は足か腰を痛めているようで、低い重心で前に進む本来の相撲が取れていなかった。勝ち越しは怪しい状況ではあったが上位不在に助けられて千秋楽に辛うじて勝ち越し。

14枚目まで下がった遠藤は終って見れば10勝5敗。少しずつ復調してきたように見えたが、勝った相撲と負けた相撲との落差が大きく、本格的な復活はまだこれからのように見えた。

ここ一年ほど、新しい波が押し寄せていることを強く感じることができる。ある者は跳ね返され、またある者は壁を突破しつつある。少しずつ時代が動いている気配を感じさせる場所だった。

<3> 今や若手ではないが

西関脇嘉風は8勝7敗で技能賞に輝いた。日馬富士・豪栄道に勝てなかったが、4連敗の後8連勝というツ

ラ相撲で、終盤の失速もあり8勝に留まった。あらゆる手段を駆使して最後まで勝負を諦めない姿勢は見ていて爽快感があるが、今場所の技能賞はやや疑問符が付くような気がする。

松鳳山は数年前の勢いが復活した感じがした。突き押しばかりではなく、相手の懐に飛び込むやいなや素早く攻め立てていく相撲が光っていた。嘉風と同じように、全身を駆使して流血も辞さず力一杯とる相撲は見ていると気持ちが良い。幕内中堅または上位になくてもならない存在になりつつある。

かたや長年にわたり「次の大関候補」というキャッチフレーズをもらっていた栃煌山は西小結に返り咲いたが、相変わらず「両差しか惨敗か」という相撲で6勝9敗に終わった。進出する新しい力、群雄割拠の時代に入り、栃煌山の時代は終わったのかもしれないというのが今場所の率直な印象。

<4> 殊勲の星の価値やいかに

下位の力士が上位の力士を破ると褒め称えられるし、本人も夢が叶ってかなりの感激を味わった上に、次への飛躍の力を得たりもする。中でも平幕力士が横綱を破ると、「金星」と名がつき長く栄誉を称えられる。

「下位の力士が上位の力士を破った」と言っても相手が「けが人や死に損ない」では栄誉の価値も薄れるかもしれない。そしてその中の何人かは殊勲賞・技能賞・敢闘賞にノミネートされるが、「横綱何人・大関何人を破った」という結果ばかりが重視されているように感じる。

今場所を見る限り、高安・照ノ富士に勝ったところでさほどの価値はないように見えたし、日馬富士を破った力士には申し訳ないが、同じような感じがする。

インタビュールームで勝者への殊勲のインタビューが行われるが、「足腰を痛めていてまともじゃない大関に勝ったぐらいでオメデトウゴザイマスと言われても困ります」と受け答えるような骨のある若手にはまだ出会わない。「殊勲の星の価値と意味」を深く考える今場所だった。

日馬富士の黒星の相手はすべて平幕力士で、つまり平幕力士に「金星」を提供した。金星を得た力士は給金に加算されて生涯の収入に良い影響を与えてくれる。相撲協会としては「出費額が増える」という困った問題になってしまうので、横綱には強くあって欲しい筈だ。

横綱という地位は絶対のもので陥落はないという特権的な地位である。かなりの額の収入を得ている訳なので、金星を提供した場合は「金星分の減額」を考えても良いのではないか。

<5> おかしな土俵がいくつか

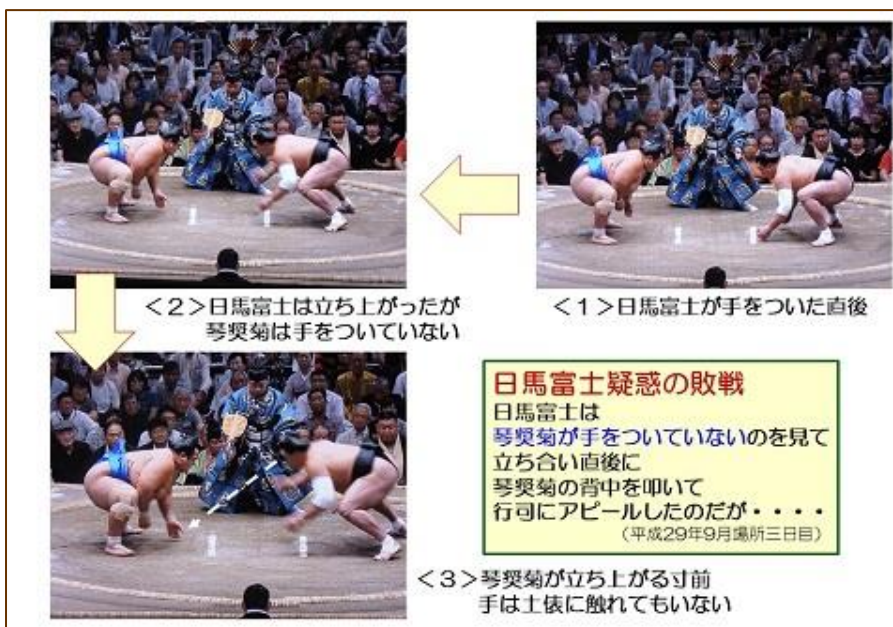
三日目の日馬富士・琴奨菊戦は日馬富士の躓きの元になった取り組み。立ち合いでふわっと立った日馬富士が琴奨菊の背中を叩いて、しかも行司の方を向いて何かを意思表示しているうちに勝負がついてしまった。

立ち合いの瞬間に気がついたが「琴奨菊が手をついていないぞ!」というメッセージだと読み取った。

取り組み終了後にビデオのコマ送りで確認してみたら、やはり琴奨菊は手をついていなかった。低い位置で仕切り、低い位置から立ち上がる日馬富士にはそれが充分見えていたに違いない。

琴奨菊の「いつになったら立つのかわからい立ちしぶり」と「怪しげなチョンつき立ち合い」は私個人としては長年にわたり違和感を持っていた。

日馬富士は土俵を下りた後、自ら



の立場（横綱）ゆえにだろうか何らコメントを発していないが、この日から三連敗していることから、心に大きな傷を負ったのかもしれない。

最近立ち合い不成立でやり直しを命じる場面が目立つようになってきたが、この取り組みは行司と審判の見落としによるものと思う。

千秋楽の嘉風・御嶽海戦も怪しげな内容だった。土俵上で嘉風を叩き込んだ後、御嶽海の指が嘉風の大銀杏の中から出てきた。解説の北の富士さんがスロービデオを見ながら「あれっ？」と声を発したが、勝ち名乗り

りが終わったタイミングなので「ま、いいか」と二の句を引っ込めた。コマ送りで確認してみると明らかに後頭部の大銀杏の中に入った指を使って叩き込んでいる。勝ち名乗りの所作に入る時に、嘉風が自分の勝ちを信じて二字口に毅然と立ったのに比べて御嶽海は負けたと思って土俵を下り始めた。行司に呼び戻されて怪訝そうな表情で躊躇に入り勝ち名乗りを受けた。おそらく取り組んだ当人同士は自覚があったのかもしれない。

この他にもいくつか行司の差し

違えがあった。行司の軍配に絶対的な力を与えていることと、審判と控え力士がこれに異を唱えることが許されている「物言い」という仕組み、もう少し質を高めていかないといけないように感じた。

物言いの後の審判長からの説明もわかりにくいものが多い。

「軍配はどちらに上がったのか?」「どこに目を付けて物言いがされたのか?」「協議の結果どのような考え方で結論が出たのか?」をきちんと説明しなければわからない。要所を押さえたわかりやすい説明が出来るのは藤島親方（元大関武双山）だけで、殆どの審判長の説明は聞くに堪えない内容だ。

土俵上で協議が行われている間は、テレビ観戦の人はビデオ録画や解説などが流れて空白にはなっていないが、国技館にいる観客には全くの空白の時間だけが提供されるので、協議が長引くとヤジが飛ぶこともある。観客を意識した仕組みの改善も必要だと、テレビ観戦しながらいつも感じている。

<6> 相撲界の今後の見通し

けがによる休場力士が増えたことで、にわかに関心力士の健康管理等が話題になってきた。

NHK 大相撲解説の北の富士・舞の海両氏はこう指摘する。

幕内力士の平均体重は約 165Kg、両氏が現役の頃に比べると 30Kg 余り増加している。これに反して力士の稽古量は減少傾向にあり、これがけがの遠因になっているのではないかと。四股・てっぽう・すり足と言われる基本の基本が大事にされず、ぶつかり稽古などもかなり減っており、けがが増えることに繋がっている。私の印象では、体格は大型化の域を脱して肥満化しているようにも感じられる。まわしの中に肉塊が収まらず上下左右からはみ出している力士も少なくない。力士は弟子入りするとまず先に体を大きくするためにという理由で大量の食事を摂らされる。若手力士の頃には激しい稽古で消耗する体にちょうど良い量の食事だったとしても、関取と呼ばれる地位に上り詰めると稽古量が減る力士が多い。しかしながら、一度拡大した食欲は元に戻らないので、ここから肥満化に入ってしまう。稽古で鍛えていない力士の体は張りがなく弛みがあるのですぐにわかってしまう。

そして、肥満化という表面的な事象の他に内臓は「糖尿病予備群」の領域にシフトしていく。これまでに多くの力士がこの道に迷い込み大成できずに終わっているのも事実。



違えがあった。行司の軍配に絶対的な力を与えていることと、審判と控え力士がこれに異を唱えることが許されている「物言い」という仕組み、もう少し質を高めていかないといけないように感じた。

物言いの後の審判長からの説明もわかりにくいものが多い。

「軍配はどちらに上がったのか?」「どこに目を付けて物言いがされたのか?」「協議の結果どのような考え方で結論が出たのか?」をきちんと説明しなければわからない。要所を押さえたわかりやすい説明が出来るのは藤島親方（元大関武双山）だけで、殆どの審判長の説明は聞くに堪えない内容だ。

土俵上で協議が行われている間は、テレビ観戦の人はビデオ録画や解説などが流れて空白にはなっていないが、国技館にいる観客には全くの空白の時間だけが提供されるので、協議が長引くとヤジが飛ぶこともある。観客を意識した仕組みの改善も必要だと、テレビ観戦しながらいつも感じている。

<6> 相撲界の今後の見通し

けがによる休場力士が増えたことで、にわかに関心力士の健康管理等が話題になってきた。

NHK 大相撲解説の北の富士・舞の海両氏はこう指摘する。

幕内力士の平均体重は約 165Kg、両氏が現役の頃に比べると 30Kg 余り増加している。これに反して力士の稽古量は減少傾向にあり、これがけがの遠因になっているのではないかと。四股・てっぽう・すり足と言われる基本の基本が大事にされず、ぶつかり稽古などもかなり減っており、けがが増えることに繋がっている。私の印象では、体格は大型化の域を脱して肥満化しているようにも感じられる。まわしの中に肉塊が収まらず上下左右からはみ出している力士も少なくない。力士は弟子入りするとまず先に体を大きくするためにという理由で大量の食事を摂らされる。若手力士の頃には激しい稽古で消耗する体にちょうど良い量の食事だったとしても、関取と呼ばれる地位に上り詰めると稽古量が減る力士が多い。しかしながら、一度拡大した食欲は元に戻らないので、ここから肥満化に入ってしまう。稽古で鍛えていない力士の体は張りがなく弛みがあるのですぐにわかってしまう。

そして、肥満化という表面的な事象の他に内臓は「糖尿病予備群」の領域にシフトしていく。これまでに多くの力士がこの道に迷い込み大成できずに終わっているのも事実。

けが人と病人続出・力士の大型化・体の大きさと体との力のバランス・稽古の量と質、様々な視点で改善策を考えるべき時期に来ている。

白鵬は復帰の可能性があるようだが大きな流れとしては下降線を辿り始めている。鶴竜は「次の場所に進退をかける」と言っているらしい。稀勢の里はけがの内容からすると完治まで長引く可能性もありそうだし、日馬富士も既に下降線を辿っている。

大関を見ると、照ノ富士は来場所関脇に陥落するが再復帰の可能性は何とも言えぬ状況だし、豪栄道は二三場所ごとにカド番を繰り返す見通しのきかない大関。高安の復活のみが頼みの綱になるが、まだ不透明。横綱が一人ずつ消えていく時期が近づいてきたが、次に横綱を目指せそうな大関が見当たらない。

さらに、大関を目指せる三役力士が出てこない大変なことになる。

一場所二場所の出来事に一喜一憂して、「大関取りだ」「綱取りだ」と騒ぎ立てるだけのことが多いが、真剣に「人材育成」という切り口で考えていく必要もあるのではないか。

「番付を維持することができるか？」大変大きな課題に直面していることを相撲協会の幹部はどのぐらい認識しているのだろうか？

以上